

多変量解析でみる敬語の通時的・共時的変化

—日中両語の有標会話を通して—

The Diachronic and Synchronic Changes in "KEIGO" by Multivariate Analysis:

By Comparing Japanese and Chinese Marked Discourse

鄭智恵（台湾 大同大学）

要旨

本研究は日中両語の敬語を通時的に共時的に考究し両語敬語今後の変化の方向を探った。通時的には両語の現代敬語は「目前の話し相手」の場を重視するようになった。その場と考えられるディベートを取り上げて考察した。共時的にも同様の結果が得られた。日本語敬語の丁寧語化現象、中国語敬語の尊辞の独尊傾向、日中両語謙讓語の式微は、これからも続くことであろうと推察された。

キーワード: 日本語母語話者；台湾人日本語学習者；台湾人中国語母語話者；日本人中国語学習者；ディベート

1. はじめに

「会話はある秩序をもった社会的行為であり、日常のものの考え方の縮図で、文化社会の知識や価値観を反映している（内田（2007：144）。）」という。会話の中にみられる「敬語の使用」は、まさしくこの「文化社会の知識や価値観」の蓄積の一つと思われる。日本語にも中国語にも「敬語」がある。この両言語の「敬語の使用」をまず先行研究を通して、通時的に考察する。

「遊びの枠（ジョーンズ 1993）」である「ディベート」（これはディベートだと宣言し何でも言えること）は、論理立つ内容をできる限り盛り込み、短時間で相手を反駁するゲームである。無駄の語が省かれる言語接触の場とも考えられる。敬語が観察された場合、それは「最小限」の「敬語の使用」とと思われる。日本語と中国語のディベートは、両語の「最小限たる敬語の使用」を具現化する場となろう。必要最小限の敬語の使用の実態は何かを、ディベートの有標会話（質疑応答）を通して、共時的に考察する。

本研究は、日中両語の敬語使用を先行研究で通時的に探求し、ディベートという場で共時的に日中両語の最小限の敬語使用の実態を明らかにする。通時的共時的な両研究手法によって、日本語と中国語のこれからの敬語変化の方向性の手がかりを得たいのである。

2. 通時的にみられる敬語の変化（先行研究による探求）

日本の「敬語」は、長い変化の道がある。社会的・階層的序列の関係重視から、場面や相手の関係重視へと変化してきた。絶対敬語・第三者敬語（尊敬語、謙讓語）から相対敬語（丁寧語）への移行が時系列的に観察され、尊敬語も謙讓語も丁寧語と連動して使われ

る傾向が見られた（宮地 他 1971；林 他 1973；外山 1977；西田 1998；井上 2005）。筆者が先行研究をまとめて、日本語の敬語の通時的変化を表 1 にした。

丁寧語は平安時代に生まれ、時代を経て語形の多様化を経て、江戸時代になってから、「～です」「～ます」の原型が生まれたのである。明治時代の「～です」の一般化、そして近代では、さまざまな丁寧語の使用がみられた。現代敬語の丁寧語化の変化が指摘されている（井上 2010）。

表 1 日本語の敬語使用の通時的変化（上下関係→対人関係）

奈良時代	動詞単独の用法における尊敬語と謙譲語だけが存在し、丁寧語は存在しなかった。
平安時代	丁寧語が生まれた。人間関係を把握する敬語がもっとも発達した時代。
鎌倉時代	丁寧語の主流「はべり」⇒「候う」に変わったことが一番の変化。
室町時代	丁寧語の語形の多様化がみられ、尊敬語からも謙譲語からも丁寧語が生まれた。
江戸時代	「です」「ます」の原型が生まれた。
明治時代	「です」が一般化し、「ます」と並んで補助動詞として丁寧語化する働きがみられた。
近代	「いたす」、「させていただく」、「動作の対象のない動詞である謙譲語」といった様々な丁寧語が生まれて、「総丁寧語化」に向かっている。

中国語の「敬語」も日本語の「敬語」と同様に、封建的・階級的体制が消えるとともに、「敬語」の変化がみられた。昔の「^{シンカ}臣下」（皇帝に向かう臣の自称）とか「^{グアイジン}大人」（政府官庁の上役に対する呼称）など多くの階級性用語は、現在ではほとんど使われなくなった。彭（2000）は、14 世紀から 20 世紀の口語体小説に使用される「敬辞」について通時的な調査を行った。「謙辞」は「敬辞」体系が崩壊すると同時に消えた、という。彭（2000：187）は、「敬辞」に基づく敬語行動は、自己の卑下よりも相手に対する「尊辞」のほうが重要で、「謙辞」よりも長く持続したのだと提示した。さらに彭（2000：193）は、中国語の「敬辞」の繁栄期は 14 世紀から 19 世紀、衰退期は 20 世紀前半、消滅期は 20 世紀後半、といった「敬辞」体系の衰退プロセスを立てたのである。表 2 を参照されたい。

表 2. 中国語の敬辞使用の変化

14 世紀～19 世紀	敬辞の繁栄期
20 世紀前半	敬辞の衰退期
20 世紀後半	敬辞の消滅期（謙辞の大半がこの時期に消えた）
近代	尊辞の使用が多い

彭（2000）から筆者によるまとめ

中国語の敬語は語彙レベルのものが特徴で、興水（1977：273）によれば、中国語敬語に比重の高いのは「呼称」である。「さん」付け、職位付け、親族関係にない人に「親族名称」で呼び合ったり、二人称代名詞の「您」（あなた様）で呼びかけたりする。そして「呼称」以外に、もっとも応用の高い敬語は、「請～」と指摘されている（興水 1977：285）。これは何か頼む時に使われる用語であり、英語の「Please～」に近い意味である。鄭（2010）でも、敬称の「您」と「請」は、中国語では高い使用率であることを示唆した。

長い変化の歴史から日本語の敬語は「上下関係」から、「親疎関係」・「場面」・「目前の話し相手」を優先するようになった（井上 2010：61）。現代中国語の敬語も、1人称（我（わたし））と3人称（他（彼）、她（彼女）、它（無生物）、牠（動物）、祂（次元の違う神仏を指す））には敬語はなく、直接対者関係にある2人称（你（あなた）⇒您（敬称、あなた様））にしか敬語はみられない。これは日本語敬語も中国語敬語も、今では「直接対面の相手」に比重が置かれていると考えられる。

以上の先行研究の通時的考察から、日中両言語における現代敬語は「親疎」、「場における目前の話し相手」といった関係重視という点が共通していると言えよう。

3. 共時的にみられる敬語使用の実態（有標会話の考察による探求）

次いでは、この「目前の話し相手」の場の一つと思われる「ディベート」の有標会話（質疑応答）を取り上げて、日中両語「敬語使用」の実態を明らかにしたい。

研究対象は、台湾人日本語学習者（TJ 群—日本語による質疑応答）、中国語と接触のない日本語母語話者（JJ 群—日本語による質疑応答）、日本語と接触のない台湾人中国語母語話者（TC 群—中国語による質疑応答）、日本人中国語学習者（JC 群—中国語による質疑応答）、の4群である。

データの持つ全情報量を効率的に表わすために、IBM SPSS17.0 Categories のカテゴリ主成分分析を用いる。カテゴリ主成分分析は、類似性の高い「変数」に注目することなく、「対象（ここでは上述の4群の研究対象）」に注目し、そして合成によって4群の特徴を見出す利点がある。4群それぞれの敬語の使用頻度を集計し、多変量解析の一つであるカテゴリ主成分分析にかける。結果の考察に入る前に、まず本研究に使われる敬語を、次のように定義したい。

3.1 本研究における「敬語」の定義

文化審議会答申（2007）では、「敬語」を下表3のように分類した。しかしこのような分類には議論が多い（郡 2008：1）。従来の3分類を5分類に改定したことが、議論的となったのである。分類に論争があるので、本研究では、山田ら（2004：1-2）の分類の大枠を取り入れて、表4のように敬語を分類し定義を行った。

本研究では、従来の3分類「尊敬語」、「謙譲語」、「丁寧語」のほかに、文化審議会答申「敬語の指針」（2007）で定義される「丁寧語」と違う「丁寧語」、そして「美化語」も加えて、2種5類に分類した。2種とは、「素材敬語」と「場面敬語」である。

5 類とは、尊敬語、謙讓語（答申での謙讓語Ⅰ＋謙讓語Ⅱ）、丁寧語、丁寧語、美化語である。各文例は、表 4 を参照されたい。

本研究はこの分類と定義を用いて、日本語と中国語のディベート（質疑応答の場合）における「敬語の使用」を考察し分析する。

表 3 敬語の分類

5 分類		従来の 3 分類
尊敬語	「いらっしゃる・おっしゃる」型	尊敬語
謙讓語Ⅰ	「伺う・申し上げる」型	謙讓語
謙讓語Ⅱ（丁寧語）	「参る・申す」型	
丁寧語	「です・ます」型	丁寧語
美化語	「お酒・お料理」型	

（文化審議会答申「敬語の指針」2007：13）

表 4 本研究における「敬語」の定義

2 種	5 類	定義	用例
1. 素材敬語 （話の登場人物に対する敬語）	1. 尊敬語	主語を高める	おっしゃる系、受け身動詞、おっしゃられる系、おられる系、なさる系、いらっしゃる系、お（ご）～になる、お待ち、お話、ご存じ、御承知、お考え、方
	2. 謙讓語 （謙讓語Ⅰ＋Ⅱ）	主語以外の成分を高める	よろしくお願いする系、～せて頂く系、お願いする系、頂く系、申し上げる系、おる系、伺う系、お聞きする系、致す系、お伺いする系、申す系、お願い致す系、失礼する系、伺い知る系、～せて下さい、私
2. 場面敬語 （話し相手である聞き手を含む場に対する敬語）	3. 丁寧語	「です」「ます」「ございます」	～です系、～ます系、～ござる系
	4. 丁寧語	場に対して自ら謙らせる	先ほど、結構、よろしい、いかが、ただいま、どうぞ、どなた、少々
	5. 美化語	自らの言葉遣いを丁寧に見せる	お金

*～系とは、変化形も含まれる

3.2 多変量解析（カテゴリ主成分分析）による結果の考察

「カテゴリ主成分分析」にかけた4群の結果は、図1の示す通りである。X軸は母語話者群を示すもので、右上（第一象限）には日本語母語話者のJJ群がプロットされ、左上（第二象限）には台湾人中国語母語話者のTC群がプロットされている。Y軸は学習者軸を示すもので、学習者群となる日本人中国語学習者（JC群）と台湾人日本語学習者（TJ群）は、Y軸の下方にプロットされている。母語話者の両群（TC群とJJ群）を繋いだ点線は学習者の両群（JC群とTC群）と向かい合っているため、対照的なパフォーマンスが示された。

日本語母語話者JJ群の近くにプロットされているのは、丁寧語、丁寧語、美化語、礼である。第1象限で見ると、謙譲語も加わる。台湾人中国語母語話者TC群の近くにプロットされているのは、あいづち^{注1}、褒め^{注2}、気遣い^{注3}、結語^{注4}である。第2象限でみると、頭語^{注5}と尊敬語^{注6}も加わる。したがって、日本語母語話者JJ群は丁寧語、丁寧語、美化語、礼、謙譲語であり、台湾人中国語母語話者TC群はあいづち、褒め、気遣い、結語、頭語、尊敬語である。これらは、両語の母語話者の丁寧表現の特徴と見て取れよう。

台湾人日本語学習者TJ群と日本人中国語学習者JC群の近くには、それとなる丁寧表現はみられなかった。よって、両語母語話者と両語学習者との対照的なパフォーマンスが示されたのである。

また尊敬語と謙譲語は、母語話者（JJ群とTC群）そして学習者（TJ群とJC群）から相対的に遠くプロットされていることが見て取れる。長い敬語の変化の歴史（通時的変化）から、中国語は、すでに「謙辞」が「敬辞」体系からなくなり、現在では「尊辞」が多く残っている（澎2000）といった先行結果と一致している。日本語も、敬語体系の「総丁寧語化」の動きが考察されているため、将来は絶対敬語・第三者敬語である尊敬語・謙譲語の使用がみられなくなる可能性は高い。図1は、その仮説を支持した結果となった。

4. 日中両語これからの敬語変化の方向性

これまでに、日本語母語話者（丁寧語、丁寧語、美化語、礼、謙譲語）と台湾人中国語母語話者（あいづち、褒め、結語、気遣い、頭語、尊敬語）の丁寧表現が考察された。その中で、本研究で定義される敬語の使用は、日本語母語話者は丁寧語、丁寧語、美化語、謙譲語であり、台湾人中国語母語話者は尊敬語（尊辞）である。

注1：中国語の「あいづち」の使用例—「嗯」「喔」「對」

注2：中国語の「褒め」の使用例—「你講得很好」

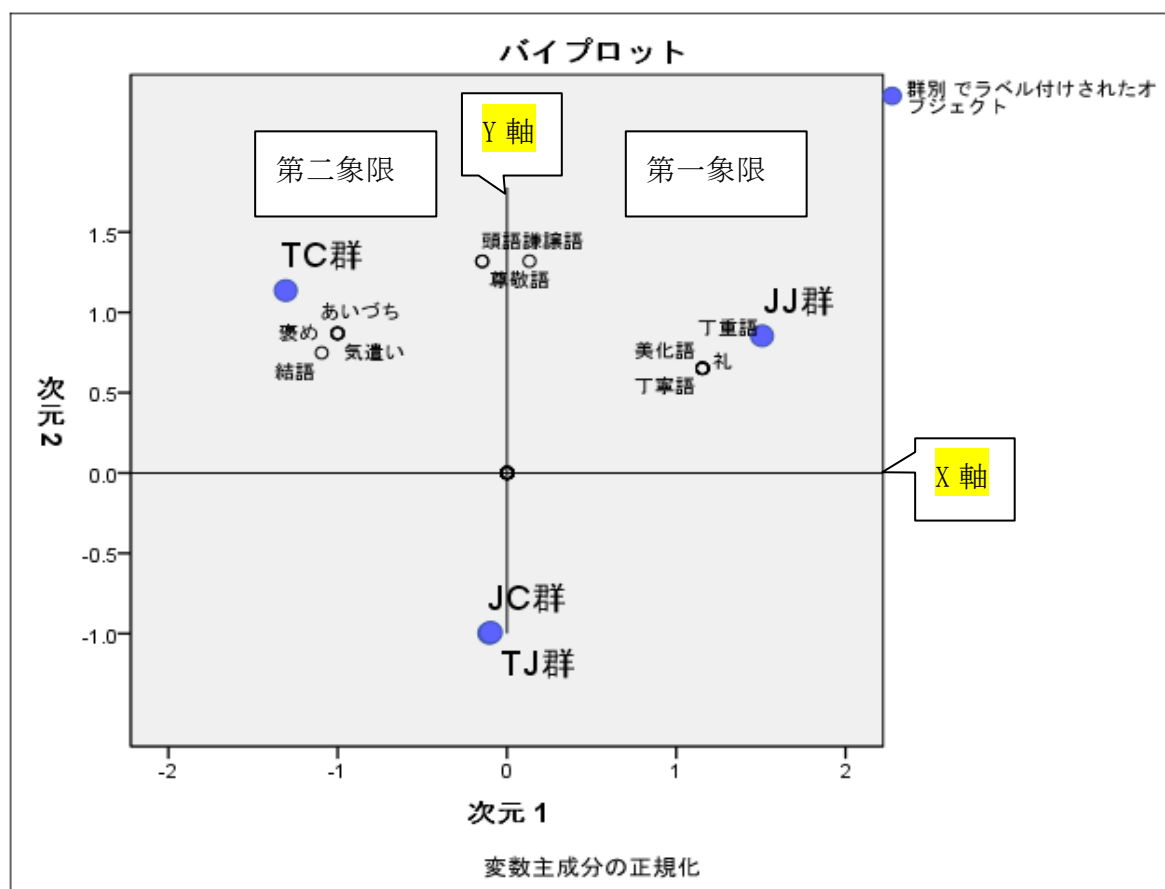
注3：中国語の「気遣い」の使用例—「喔，你不喜歡」「沒關係，我在解釋一次」
「好，沒關係，我們下一步」

注4：中国語の「結語」の使用例—「謝謝」「這是大家可以調整，這是重點，謝謝」「謝謝大家」
「謝謝對方辯友」

注5：中国語の「頭語」の使用例—「您們好」「大家好」「對方辯友好」「你們先」

注6：中国語の「尊敬語」の使用例—「請」「請問您」

図 1. 4つの対象群の語用特徴



謙讓語と尊敬語は遠くにプロットされたので、日中両語対面関係の有標会話では、使用頻度が低いことがわかった。これは通時的な先行研究の結果と一致している。

日本語敬語の丁寧語化現象、中国語敬語の尊辞の独尊、日中両語の謙讓語の式微は、これからも通時的にも共時的にも続くことであろうと推察される。

5. まとめと今後の課題

日中両語敬語の変化をまず先行研究を通して通時的に考察を行った。両言語とも上下関係から対面関係の敬語使用へと変化があった。この通時的な結果をふまえて、ディベートという対面関係の場面を取り上げて、さらにその結果を共時的に検証した。ディベートは「遊びの枠」における有標会話（質疑応答）であるため、最小限たる敬語の使用が具現化できると思われる。日本語敬語の丁寧語化と謙讓語、中国語敬語の尊敬語は、最小限たる両言語の敬語使用として特徴付けられたので、日本語教育と中国語教育に提示できる示唆となろう。

これまでの通時的共時的な結果をまとめると、今後日中両言語の敬語変化の方向は、日本語敬語の丁寧語化現象、中国語敬語の尊辞の独尊、日中両語の謙讓語の式微が引き続き進行されよう、との手がかりが得られた。

ディベートという対面関係の場のほか、これからも日常生活におけるさまざまな対面関係の場をみていく必要がある。さまざまな場での共時的な研究を、通時的に繋いでいくことを心がけたい。

【参考文献】

- 文化審議会 (2007) 「敬語の指針」 http://www.bunka.go.jp/1kokugo/pdf/keigo_tousin.pdf
- 鄭智恵 (2010) 「中国語ディベートの言語的資源の多用—丁寧度」 『明海日本語』 15, 明海大学日本語学会, 91-92
- 林四郎・南不二男 (編) (1973) 『敬語講座 6 現代の敬語』 明治書院
- 井上史雄 (2005) 「新型敬語の用法」 『言語文化研究Ⅲ—現代日本語の様相』 放送大学教育振興会, 163-170
- (2010) 「敬語の心—敬語変化の社会的背景—」 『応用言語学研究 12』 明海大学院応用言語学研究科紀要, 59-70
- K・ジョーンズ (1993) 「日本人のコンフリクト時の話し合い—アメリカ人研究者から見た場合—」 『日本語学』 12, 4月号, 明治書院, 68-74
- 郡千寿子 (2008) 「文化審議会の答申と敬語教育」 『弘前大学教育学部紀要』 9, 1-7
- 興水優 (1977) 「中国語における敬語」 『岩波講座日本語 4 敬語』 岩波書店, 271-300
- 宮地裕 他 (1971) 『講座日本語学 9 敬語史』 明治書院
- 西田直敏 (1998) 『日本人の敬語生活史』 翰林書房
- 彭国躍 (2000) 『近代中国語の敬語システム—陰陽文化認知モデル』 白帝社
- 外山映次 (1977) 「敬語の変遷 (2)」 『岩波講座 日本語 4 敬語』 岩波書店, 135-167
- 内田伸子 (2007) 「女性と男性の会話—会話は“性差別を再生産する装置”か？」 『リスク社会を生き抜くコミュニケーション力』 内田伸子・坂本章 編著, 金子書房 133-147
- 山田敏弘・永田千尋・小林雅士・岩田有生 (2004) 「敬語教育に関する一考察」 『岐阜大学教育学部研究報告 教育実践研究』 第六巻, 1-20